

特集

「できる」を見つけるボランティア!

2025年9月 地球環境再生植林フォーラム2025 in フィジー



「地球環境再生植林フォーラム2025 in フィジー」ツアー（山梨県支部）

1980年 苗木一本の国際協力キャンペーン



「21世紀に太陽と水と空気を！」をキャッチコピーに、オイスカは1980年から「苗木一本の国際協力キャンペーン」を国民運動として実施。全国のオイスカ組織を中心に、大勢のボランティアが街頭募金やチャリティバザー、チャリティイベントに参加した（写真は東京都）

オイスカと踏み出す国際協力への第一歩

2026年は、国連が定めた「持続可能な開発のためのボランティア国際年」。持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けたボランティアの役割と重要性が、今、世界で再び注目されています。環境問題や貧困など、地球規模の課題は大きすぎると感じられるかもしれません。しかし、その解決を担うのは私たち自身です。一人ひとりの「できること」の積み重ねが、持続可能な未来をつくる力になります。オイスカも、そんな一人ひとりの思いと行動に支えられ、活動を続けてきました。今号では、その多様なボランティアの取り組みを紹介します。

1970年 東パキスタン救援街頭募金



11月に、東パキスタン（現バングラデシュ）を襲ったサイクロンの猛威は、「20世紀最大の被害」として、遠く離れた日本にも衝撃を与えた。オイスカは直後から街頭募金を展開。多くの支援を得て、災害救援調査団を現地に派遣した（写真は静岡県）

2014年 海岸林再生プロジェクト



2011年の東日本大震災で被災した海岸防災林を再生する「海岸林再生プロジェクト」では、14年から一般ボランティアの募集を開始。苗づくりから間伐まで林業作業員の工程を補完する役割を果たしている（宮城県名取市）

1994年 フィリピン30日植林ボランティア



1980年代からオイスカ全国組織主体の海外植林フォーラム（ツアー）が活発に開催されるようになり、90年代には日本人青年が長期間現地に滞在するボランティア企画も実施。研修生や「子供の森」計画参加校の子どもたちと共に緑化に励んだ（写真はケソン州ルクバン）

2006年 ベルマークボランティア



各地から送られてきたベルマークを集計。「子供の森」計画支援につながり、気軽にできる国際協力として、子どもから年配の方まで幅広い層のボランティアが活躍している



「やつてみよう」の 気持ちが第一歩

皆さん、ボランティアという言葉に、どんなイメージを持っていますか。

日本では、阪神・淡路大震災により、市民ボランティア文化が社会に広まつた—1995年を「ボランティア元年」と呼び、その言葉や活動がより身近なものになりました。90年代後半から2000年代にかけて、徐々に学校の課題やCSR（企業の社会的責任）の一環としての「ボランティア」が広がり、活動に参加したという方も多いのではないかでしょうか。その一方、「課題のために仕方なく」「時間がないから難しい」などという理由から、ボランティアを「無償の奉仕活動」特別な人がするもの」と捉えてしまふこともあるかもしれません。しかし、語源とされているラン語「Voluntas」が「自

由意思」を意味するように、ボランティアの本質は自発的な行動にあります。厚生労働省も、ボランティアを「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」とし、その性格として「自主性（主体性）」「社会性（連帯性）」「無償性（無給性）」を挙げています。つまり「社会のために何かできる」とをやってみよう」という思いや行動こそがボランティアであり、その第一歩なのです。

自分の「できる！」を見つけよう

90年代後半から2000年代にかけて、徐々に学校の課題やCSR（企業の社会的責任）の一環としての「ボランティア」が広がり、活動に参加したという方も多いのではないかでしょうか。その一方、「課題のために仕方なく」「時間がないから難しい」などと

オイスカは、そうした思いを持った多くの方々に支えられて、創立から現在まで活動を続けてきました。その関わり方はさまざまです。3ペー

ジで紹介された—1960年代当時の日本人農業開発団も、自らの知識や技術を活かし、アジアの貧困を農業の改良普及によって改善しようと、志を持って各国へ赴きました。また開発団員のような長期間でなくとも、ツアーパーを通じた海外での植林や、国内での街頭募金、チャリティバザーの開催など、全国各地でボラン

ティアが活躍。「ボランティア元年」以前から、特別なことではなく、日常の選択の一つとして「できることをやってみよう」がありました。とはいっても情報化が進み、そのスピードに追われるようになります。現代はますます忙しくなっています。内閣府が全国の8200名を対象にした調査によると、過去一年間に「ボランティアに参加したことがある」と回答したのは全体の17・4%にとどまりました。また、参加の妨げとなる要因について、「時間がない（45・3%）」「ボランティア活動に関する十分な情報がない（40・8%）」ことが上位に挙げられています。

一人ひとりの生活と、社会、そして世界の課題は地続きです。限られる時間の中で、地球や自然、皆の暮らしのため、自分自身に何ができるのかを、オイスカと一緒に考えてみませんか。

次ページから、オイスカの国内外のボランティア活動を、3事例を中心に紹介します。

※1 厚生労働省「ボランティアについて」
※2 内閣府「2022年度（令和4年度）
「市民の社会貢献に関する実態調査」

—企業の社会貢献の視点から—

ボランティアの意義と近年の傾向

公益社団法人日本フィンソロピー協会（JPA）

事務局長 青木 高さま

当協会では、健全な民主主義社会の実現に向け、性別、年齢、障がいなどに関係なく、一人ひとりが社会の中で役割を果たせるよう、個人の社会参加を推進しています。

1995年の阪神淡路大震災からボランティアが日本で広がり、当協会はさまざまなかたちでNPO／NGOと連携し、ボランティアを紹介してきました。2020年頃から、企業のSDGsへの取り組みの方向性として、「社会と企業の持続可能性のためには、従業員の社会参加意識を高めることが不可欠」という認識が強くなり、その手段として従業員のボランティア参加を推進する企業が増えています。活動は、環境問題のみならず、障がい者支援、次世代育成、地域活性化などさまざまです。社会課題も複雑化してきており、従来のジャンル別で考えるのではなく、課題の本質を見極めつつ、その中で必要とされている活動を提案することを

人と企業の社会貢献を応援する
Philanthropy



心掛けなければと思っています。年々各企業の参加数は増えていますが、ボランティアは参加する人数を増やすことが目的ではなく、あくまで社会課題の解決が目的です。プロボノなどNPO／NGOに対し、長期でコミットして取り組む活動も増えつつあります。当協会としても、誰もが参加できるボランティア活動を推進するとともに、NPO／NGOと共に社会課題に取り組む意欲のある方をつなげる機会を提供し続けたいと考えています。

公益社団法人日本フィンソロピー協会（JPA）

一人ひとりが「社会課題の解決」の実現に向けて力を尽くす主体であるとして、NPO／NGOとも連携しながら、企業や、その従業員をはじめステークホルダーなど、個人の社会参加・社会貢献を推進する多様な事業を展開。オイスカも「企業のサステナビリティ推進支援事業」を通じて、多くのボランティアを受け入れている。

現地の活動、 文化・人に触れる 海外ボランティア

オイスカが活動する各国で、人材育成や環境保全、農村開発の現場を視察するだけでなく、プロジェクトに参加する地元住民や「子供の森」計画に参加する子どもたちと一緒に、植林や農作業などに取り組みます。派遣先はフィリピン、インドネシア、タイ、モンゴル、フィジーなど。その時々によって異なりますが、オイスカの各支部や推進協議会が企画するツアーをはじめ、支援企業、個人単位でのボランティアなど、さまざまな参加のかたちがあります。

実施日数(目安): 1週間程度

POINT!

- ・現地の活動の成果や課題を肌で感じることができる！
- ・農村の人々との交流や植林作業など、観光ツアーではできない体験ができる！
- ・日本語が話せる現地スタッフの存在が心強い！



住民たちも一緒になって、山間部の植林地に向かう

活動内容はツアーによってさまざまですが、ほとんどの場合、メインイベントは、やはり植林です。山間部や平野



タイ植林ツアー

PICK UP

1975年に活動を開始して以来、タイではオイスカタイランドが中心となり、たくさんのボランティアツアーや受け入れてきました。そこで培ったノウハウと、現地スタッフのチームワークを活かした高いホスピタリティで、参加者の満足度が高く、何度もタイを訪れるボランティアも多くみられます。派遣の主

体は、主にオイスカ支部組織や支援企業など。継続的な訪問で現地の活動を応援する団体もあり、プロジェクトに参加する住民やスタッフの大きな力となっています。

活動内容はツアーによってさまざまですが、ほとんどの場合、メインイベントは、やはり植林です。山間部や平野



自然の恵みを肌で感じるエコツアー！

タイでは、参加者に現地の課題や活動の意義をより深く理解してもらい、より良い体験にしてほしいとの思いから、必ず初日にオリエンテーションを行っています。現地スタッフと日本からのボランティア双方の熱い思いが、プロジェクトを支えています。

現地住民 Voice

皆さんとつくり、育ててきた森を、大切に守っていきます！

ボランティアの皆さんには、はるばる遠いところからやってきて、私たちと共に木を植えていただき、心から感謝しています。

私たち植林グループのメンバーは、木を植えるのはもちろんのこと、事前の苗木の準備や植林地整備なども行っています。これがなかなか重労働なのですが、ボランティアの皆さんと一緒に活動するときのことを思うと、全く苦にはなりません。海外から来るさんは、ここにいる間、慣れない土地、慣れない環

部での植林と、沿岸部でのマングローブ植林、いずれも重労働ではありますが、地元住民と共に取り組む作業は、とてもやりがいがあります。植林のほかにも、ホームステイや「子供の森」計画参加校の訪問、さらに近年はマングローブプロジェクトにおける石鹼づくりやカヤックでの森林浴などのエコツアーも人気のプログラムです。

境内の中でも、全力で頑張ってくれます。そして、まるで家族や兄弟であるかのように接してくれて、いつも楽しく作業することができます。それが、とてもうれしいのです。

これまで森づくりを通して、日本をはじめとする世界各地に、たくさんの友人ができました。そんな皆さんと一緒に苗木を植えて、育ててきた森は、私たちにとってかけがえのないものになっています。これからも生涯をかけて、自分たちの手で守り続けたいと思っています。本当にありがとうございます。

トンカム・タチョーさん

ラノーン県/
ンガオ村グループメンバー





植林地までトラックの荷台に乗って移動!
悪路もアトラクションのように楽しんで!

オイスカタイの植林ツアリーの目的は2つあります。一つは、日本からの参加者への啓発です。単に植林し、感動することがゴールではなく、帰国後に世界の森や自然を守るために、次の一步を踏み出すきっかけとなつて、はじめて成功だと考えています。そのため、オリエンテーションの実施や、活動の意義やタイ

幸せをつくる 森づくり



の森について詳しく説明した
ハンドブックの作成、訪問毎
の活動を記録できるグリーン
パスポートの配布など、深い
理解や次の取り組みにつなげ
る仕掛けづくりにも力を入れ
ています。もう一つの目的は
タイの住民たちの士気を高め
ることです。彼らは森づくり
プロジェクトの主体として、

り、植林、その後の管理と大変な作業を何年も続けています。これは住民たちだけでもできるのですが、遠く日本から来てくれるボランティアの存在が、彼らを力づけ、彼らの森づくりへの誇りにつながっています。

このように、植林ツアーハンモックを学び、応援し、お互いに力をもじらう大切な機会となる

A group of young people, mostly young women, are smiling and laughing together in a candid, joyful moment. They are dressed in casual clothing, including t-shirts, hoodies, and a light blue jacket. The background is plain and light-colored.

してその後には、日本人とタイ人が大切な友となります。タイでは、昔から『森をつくる人は幸せをつくる』と言われています。私たちは森づくりを通して仲間となり、幸せを生み出していくのです。未来に生きる子どもたちへ幸運をもたらすために、皆で頑張りましょう！



日本語指導ボランティアも!

フィリピンの若者 に日本語を教える 加藤先生

実施日数(目安): 1ヵ月~

現地研修センターで、研修生や技能実習生として訪日予定の青年たちに日本語を指導。現在、フィリピンのバゴ研修センターで活動している加藤義昭先生は、中部日本研修センターでもボランティアで研修生たちに日本語を教えています。



日本の学校で 使われていた ピアニカを寄贈

会員の宮澤児郎さん（広島在住）は、ご自身の音楽仲間と共に楽器やアンプ、マイクなどの寄贈品を携え、20年以上にわたりフィジーを訪問。教会や学校などに寄贈し、子どもたちには演奏の指導も行っています。

←宮澤さんのご友人(左)が演奏を指導



子どもたちの生きる未来が、豊かな自然とともにありますように！

〈富山県支部〉 緑の里山保全 森づくり活動



森林教室では紙芝居を使い、分かりやすく子どもたちに森の働きを伝えています！

富山県支部では、「緑の里山保全森づくり活動」を2002年から実施しています。富山市内の旧大沢野町下夕林地区で4年間、坂本地区で3年間、猿倉山麓で10年間取り組み、17年からは立山町天林地区で約1.1haの森づくりを継続しています。猿倉山麓では、長年の取り組みによって、植樹したヤマザクラが大きく生長。ゴールデンウィークには満開となり、地域の人々を楽しませています。

現在活動する天林地区では、

富山県支部では、「緑の里山保全森づくり活動」を2002年から実施しています。富山市内の旧大沢野町下夕林地区で4年間、坂本地区で3年間、猿倉山麓で10年間取り組み、17年からは立山町天林地区で約1.1haの森づくりを継続しています。猿倉山麓では、

これまでの9年間で約160本を植樹してきました。当初に植えた区画は、春には桜が咲き誇り、秋には栗が実る豊かな森となり、人々の憩いの場として親しまれています。

また24年11月には、富山県の「森づくり活動によるCO₂吸収量」の認証を受け、天林地区の森づくりによるCO₂吸収量が年間1.7tと認定される結果も上がっています。25年6月には、雨の降る中、企業や個人の会員をはじめ、地元ボランティアの子どもたちなど、ボランティア総勢102名が参加し、コナラ、クヌギ、クリ、ミズナラ、ブナ、サクラの6種類120本を新たに植樹しました。併せて、次世代を担う子どもたちを対象に、植える木の種類や特徴、森の働きなどを学ぶ森林教室を開催し、自然の大切さについて考える機会を提供しました。

また、苗木が立派に生長するよう、下草刈りを5、7、9月の年3回実施しています。腰の高さまで生い茂った雑草を、刈払機や鎌で刈る大変な作業ですが、毎回多くのボランティアが参加し、活動を支えています。

ふるさとの緑と 暮らしを守る 国内ボランティア

森づくり編

森を健全に保つためには適切な管理が不可欠。これは、日本の森も同様です。国内のオイスカ支部、推進協議会では、ボランティアを募りながら、地域の森林保全・整備活動に取り組んでいます。私たちにさまざまな恵みをもたらしてくれる森に足を運び、自らの手で守る体験をすることで、自然について学び、その尊さを感じることができます。家族でも参加できる活動もあり、子どもたちの自然体験の場ともなっています。

実施日数(目安)：半日～1日

POINT!

- ・地域の森づくりに貢献！
- ・日本の森の課題や森林保全の必要性が分かる！
- ・子どもたちと一緒に参加できる！

ボランティアVoice

富山県の誇る立山の麓、天林地区でのボランティアを通して、多くの方と顔馴染みになりました。植えた木々の生育具合や下草刈りの大変さなど、参加者同士の会話で心と心の交流になりました。木の生長も実感しています。さまざまな理由で参加されていることと思いますが、私は、頼まれてオイスカの会員になったこともあります。初めはこの活動に全く関心がありませんでした。参加を決めたのも支部からの声掛けで、仕方なくのことでした。しかし、皆が汗を流して一

生懸命に作業し、木々の生長を眺めながら談笑する姿を見たり、作業後の充足感の中、仲間との共通の話題で盛り上がるうちに、積極的に参加するようになっていました。

その縁で、支部の海外植林ツアーにも毎回参加するようになり、タイでは「兄貴」と呼んでいたソンポンさん(オイスカタイ)との出会いもありました。森づくりをきっかけに、仲間や海外との交流にもつながるボランティアの魅力を、多くの人们にも広げていきたいです。



杉本 仁志さん(写真左)

昨年12月に
「兄貴」と久しぶりに
再会しました！





ふるさとの森を守る ということ

オイスカ富山県支部 木村 肇

森は、水源涵養や二酸化炭素の吸収など、私たちにさまざまな恩恵を与えてくれます。私たちにとってふるさとの森は、とても大切な存在です。

私が富山県支部の「緑の里山保全森づくり活動」に事務局として携わるようになって、今年で2年になります。支部では毎年、年一回の植樹と、年3回の下草刈り作業を行っていますが、そうした作業の中で土に触れ、一本一本苗木を植えていると、自然の命のつながりを実感することができます。また、子どもたちに自然の大切さを伝えながら、一緒に植えた木々がやがて大きな森になることを思うと、未来への希望を感じます。

植えるだけでなく、苗木が生長するための整備活動もと



上／刈払機での作業は、特に安全に気を付けています
下／下草刈り作業後。日の光がしっかりと当たることで立派な木に育ちます

長に期待が膨らみ、さらに大きくなった姿に再会できるのが楽しみになります。一方で、動物などに荒らされないか心配にもなります。

植えた苗木が森となるには長い年月と、たくさんの手間がかかります。しかし、森は鳥や昆虫などの生き物のすみかとなるだけでなく、水や空気を提供するなど、私たちの

生活にも大きな恵みをもたらします。ふるさとの森を守ることとは、私たち自身に正しく使うために講習を受け、修了証をもらいました。高く伸びた雑草を刈っていくと、隠れていた小さな苗木が顔を出し、生命の力強さを感じるとともに、これから生じるともに、これからも

ても重要です。天林地区では、1.1haの敷地の雑草を刈払機で刈りますが、私は機械を安全に正しく使うために講習を受け、修了証をもらいました。

次世代へ豊かな自然を引き継ぐための大切な責任です。これからも植樹や森林保全の取り組みを続けていきたいと思います。

そしてボランティアの皆さん、美しいふるさとの森を守るために、引き続き活動へのご参加、ご協力ををお願いいたします。



植樹作業は
子どもたちも活躍!

// さまざま応援の
しかた //

海岸林再生プロジェクト

実施日数(目安) : 1日



東日本大震災で被災した、宮城県名取市のマツ林を再生する取り組みです。プロジェクト開始から14年経つ現在も、クズの刈り取りや間伐、モニタリングなど、全国から参加するボランティアが活躍。これまで延べ16,000人がボランティアに取り組みました!

〈2026年度ボランティア実施日(予定)〉
5月30日／6月6・27日／7月11日／
9月5・26日／10月10日／11月7日

※詳細・お申込みはHPをご確認ください! ▶



活動ブログ
随時更新中!

富士山の森づくり

実施日数(目安) : 半日～1日



「協働による森づくり」として企業、団体、行政の協力のもと、支援企業の社員の方々のボランティア参加もいただきながら、活動を進めています。年に一度の「オイスカの日」には、各地のオイスカ会員を含む150名超のボランティアが集まり、森林整備を行っています。

〈2026年度「オイスカの日」〉
6月下旬～7月上旬に実施予定です。

※これまでのボランティア活動のレポート
はこちらからご覧いただけます! ▶



詳細を
チェック!



ボランティア Voice

皆さんこんにちは。私は、2023年度にSOMPO環境財団の実施する「CSOラーニング制度」というインターンシッププログラムに参加し、オイスカを知りました。この出会いと、研修センターでの活動は、私の人生と価値観を変え、世界に目を向けるきっかけを与えてくれました。その後、ニュージーランドでのワーキングホリデーを体験し、世界の人々と関わることの楽しさを改めて実感しました。

そして、この経験を思い出で終わらせないために、オイスカでのボランティアを決め、現在、研修生や技能実習生への日本語指導やSNSを通じた広報などに携わっています。

私は、「自ら行動して得た経験は、必ず生きる肥やしとなり、人生を豊かにしてくれる」と信じています。オイスカでの活動を通じた学びは、私の生きる糧です。これからも学び続け、恩返ししていきたいと思っております。

荒川 良寛さん

2023年度中部日本研修センター
インターン



毎月研修生や技能実習生の散髪をしてくださる渡辺さん(右)。時にはスタッフもお世話になっています

皆さんに共通するのは、オイスカの理念を深く理解し、楽しみながら、継続して取り組んでいること。活動の場はそれぞれでも、志を同じくす仲間として、各農村青年の育成をサポートしています。

愛知県豊田市にある中部日本研修センターでは、オイスカ愛知県支部・県下の推進協議会主体の活動や、個人参加のボランティアによって、センターの運営をさまざまな面から支えていただいています。

特に、農業研修の大切な実践の場である農場の管理では、20年以上にわたり、ボランティアとしてスタッフや研修生と共に汗を流してきた酒向淳治さんの存在は欠かせません。また鈴木哲夫さん、岩瀬和義さんも継続的に活動し、その農業への探求心や熱心な姿勢

は、研修生の刺激になっています。鈴木さんは、地元スーパー「やまのぶ」への出荷も担当しています。さらに、農業ボランティアを通じて、たくさんの方が共に農作業に取り組んでいます。

農業以外の場面でも、神谷弘さんは、豊田地区の啓発活動を担当し、地元での仲間づくりに尽力。中村浩之さんは、センターの広報紙「中部NOW」の編集や日本語指導、大工仕事までなんでもこなします。そのほか、福田香緒里さんは、日本語や日本文化を学ぶ一環としての歌唱指導、渡辺素巳さんは理髪、元インターの荒川良寛さんはSNS運営など、一人ひとりの持てる時間や技術を活かして、あらゆる面でボランティアが活躍しています。

PICK UP

農作業からSNSまで！ 地元ボランティアの活躍

（中部日本研修センター）

3スキルを活かして 人材育成サポート! 国内ボランティア

海外青年への農業指導や技能実習の基礎研修などを進める国内研修センターでは、さまざまな場面でボランティアが活躍しています。その活動は、実習農場での農作業や、研修生・技能実習生への日本語指導のほか、HP・SNS運営、パソコンなど精密機器の整備、食堂の調理補助、農産物の出荷など多岐にわたります。研修生との交流の機会も多く、日本にいながら得意を活かして国際協力や交流ができる、やりがいのあるボランティアです。

POINT!

- ・スキルを活かして継続的に活動したい方向け！
- ・研修生や技能実習生の成長を近くで感じられる！
- ・センター行事・イベントへの参加で、研修生との交流の機会も！

実施日数(目安)：数時間～1日を継続的に

研修
センター編





感謝の心と
仲間の存在が社会に
笑顔を生む力になる

オイスカ農田推進協議会
会長 梅村 清春

豊田推進協議会はイベント
や行事だけでなく、ボランティア活動も積極的に行っています。

中でも、2022年度から
毎月一回（第2土曜日）のペ
ースで継続的に実施している

「農業ボランティア」では、
中部日本研修センターを農場

運営の面でも支えたいと会員
有志が集まり、農作業に汗を

流しています。5月は梅の収
穫、6月は3千本のサツマイ

モの苗植え、7～11月はレモ
ン・栗の果樹園と梅園の草刈

り、10月は約2tのサツマイ
モを収穫、12～1月は果樹の
霜よけと梅の木の剪定、さら

に3月は稻畑の播種など、年
間を通して活動しています。

参加者は毎年100名ずつ



76名が参加し、サツマイモの苗3,000本を植えつけました

増え、4年目の今年度はすでに400名を超えていました。笑顔あふれる社会を実現するために、ボランティア精神を持つて活動する場、自然の中で老若男女が一緒に活動し心と体が大自然に溶け込むような場として、オイスカ会員以外にも広く参加を呼びかけています。真夏の灼熱地獄でも酷寒であろうとも、ボランティア仲間はいつも顔を出してくださいます。なぜ、来ていただけるのか。たとえ短時間

くださいます。なぜ、来ていただけるのか。たとえ短時間

です。ただ、たとえ短時間

です。ただ、たとえ短時間

です。ただ、たとえ短時間

です。ただ、たとえ短時間

です。ただ、たとえ短時間

です。ただ、たとえ短時間

です。ただ、たとえ短時間

です。ただ、たとえ短時間

です。ただ、たとえ短時間



研修生や海外スタッフも一緒に作業します！

限らずボランティア参加の希望があれば、どうぞ中部日本研修センターまでご連絡ください。



親子で
楽しく参加！

// さまざま応援の
しかた //

気軽にできるボランティアいろいろ

実施日数（目安）：数時間～1日



詳細はこちら

研修センター以外でも、得意を活かしたボランティアはたくさんあります。ベルマーク・書き損じはがきの収集・集計や、オイスカのプロジェクトやセンターの生産品の購入、ポイント寄附なども、国内外の活動を支える大きな力になります！

随時募集中！

切って、集めて、世界の森づくり支援！
ベルマーク収集ボランティア

ベルマークは、ベルマーク教育助成財団の友愛援助を通じて1点1円となり、「子供の森」計画の支援につながります！仕分けの必要はありません。郵便や宅配便などでオイスカまでお送りください。

〈送り先〉
〒168-0063
東京都杉並区和泉2-17-5
公益財団法人 オイスカ 啓発普及部



頼れるリピーターの皆さん